

短詩 北の花 : 文苑

著者	藤輪
雑誌名	龍南會雜誌
巻	8 9
ページ	6 1 - 6 2
発行年	1901-12-24
URL	http://hdl.handle.net/2298/5260

實。瓜子、漬、糟、其、味、新。別有箇廬遮奈佛。千秋兀坐獨含嚙。

湖海曰。出語流暢。自有才調。所謂南都墨。奈良漬奈良大佛。皆入詩中。而不落懷古常套。轉見極力追新之妙。但其無精彩處。更要一段洗練。

其三大津

龍、珠、在、手、豈、相、提、不、意、帝、城、聞、鼓、聲、已、斷、蜀、江、千、丈、鎖、誰、封、函、谷、一、丸、泥、琵琶湖上、日、空、落、三、井、寺、邊、鴉、亂、啼、莫、向、驢、人、談、往、事、好、風、景、裏、易、悽、悽、。

湖海曰。弘文帝瀨田之事。古今同此一哭。作者熟精史事。有識有筆。宜其一聯用典。竟得名句。是不待贅嘆也。

短詩

北の花

あゝ君が忘れ形見の歌ありし星靜かなる豊平の水。
豊平の君をしのびて墓になく吾が瘦せ姿藻岩嵐吹く。
豊平の岸にたづみろの昔君がみ歌の星をたかみき。
花を手向け君がみはかにぬかづけばあわれはらはら榆の花散る。

夕闇に笛をきつ、野をゆけば榆の木かげにかけす鳥のなく。

藤 輪

風かほる榆の木かげに小羊が静かに眠る夏の夕ぐれ。
野を出でて丘にのぼれば榆の木のかげに眞白き小羊眠る。
紫の花咲き香る榆の蔭に行方思いし蝦夷の三日月。

さくる色の雲紫に匂う夕青森の港吾れ舟出でせり。
夕星の色はなやかに青森の波静かなる夏の夕かな。
ま帆かた帆かすかにひびく鐘をつたへ小樽の港日は暮れんとす。

むらさきの横雲匂う夕張山鐘のひびきにうすれゆくかな。
静かなる石狩川の末とうみ雲むらさきに日は暮れんとす。
漁舟一つ一つと消えゆきて水静かなる石狩川のくれ。
山は見えず雲たち迷いひろびろと森数十里石狩の原。
草青き野原うねれる千歳川のきしに花咲き小羊眠る。
止むなくバ羊を飼いて紫の霧たつとゆう藻岩に入らん。
夕張川岸に牧草多ければ里の子の歌今日も聞くかな。
青々と牧草茂る石狩の廣野をかすめ鷺一つとぶ。
朝たちて林檎の林十里ゆけば海静かなる小樽の港。
オコックの白波よする磯の舟に白ひげ長きアイヌ見しかな。